

## 【2章 A】

「う〜い、しょっと、おら、懷いてくる劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>ども……！」

死の樂園。そう呼ばれるエリザの別邸の中にあう、『牧場』と呼ばれる広く大きな部屋に大柄で醜い使用人、グズはいた。

部屋は非常に広いが、ただ広いだけであり、内部には家畜用の大きな水桶が適当に間隔を空けて並び、また飼料としか思えないドロドロの餌が注ぎ込まれた餌桶と、用を足すための桶、そして身体を洗うための大きめの水桶があるだけである。

その部屋、牧場の中には――。

「はああ♥ はああ♥ 飼い主さま♥ わふう♥」

「あ、あのっ、私……た、食べ頃です♥」

「飼い主さま♥ 飼い主さま♥」

――ざっと数えるだけでも30匹を超える劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>が裸で、四つん這いで暮らしていた。

どいつもこいつも全身柔らかそうな肉を携えた美少女ばかりであり、餌を食べていたり、水を飲んでいた劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちも、競うようにグズの足元に集まってきていた。

彼女たちはエリザに『殺して』欲しくて集まった劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>であり、自分たちの順番が来るまではこの部屋で過ごしている。

と、言っても監禁ではない。

部屋の鍵は常に開いているので、出ようとすれば簡単に外出することが可能だ。

しかし、この部屋から過去に劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>が逃げ出したことは一度としてない。

彼女たちは全て、『エリザにイキ殺して』貰うのを楽しみに生きているのだ。

エルフも、犬も、猫も、ウサギも、牛も狼に竜までもが、エリザから与えられる『死』を今か今かと待ち望んでいた。

それと残らず低身長でマゾで服従体質の恥さらし劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちは、人間の男を見上げるのが大好きだった。

それ故に大柄なグズは人気であり、水や餌を与える為に彼が訪れる度に大騒ぎで集まって媚びてくるのだ。

「あ〜、邪魔だァ、邪魔だ……！」

”げしっ！”

足にまとわりついてくるデカ乳<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族たちをグズは雑に蹴り飛ばしていく。

本気ではないまでも遠慮はしていない大男の蹴りで腹を蹴られて転がっていく犬娘。  
普通ならば苦痛に悶えるだろうが――。

「きゃううん♥ はああ♥ い、いたい……♥」

「あ、わ、私も！ きゃんっ♥」

――そこは劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>、痣になりそうなお腹を押さえてはプルプル震えて軽く潮吹きまでかましている。

それを見た他のメスもお仕置きの蹴り欲しさにグズの足元にまとわりついていた。

メスの匂いに、こんな暮らしだからこそ、美少女といえど多少は家畜の臭いをさせる劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちを蹴り、踏みつけながら水と飼料を各桶に補充していくグズ。

「ふいい……こんなもんかァ」

補充された餌をや水を四つん這いのまま、桶から直接食って食べていく劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>、たち。

デカ乳を揺らして、むっちりのデカケツもフリフリ♥ 劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>としては夢のような家畜扱いに興奮して、餌を食いながら片手でおまんこを穿りまわす者までいる。

ちなみに、ここで家畜暮らしをしている劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちはエリザの元に出す前にはグズによって洗われるが、洗われるだけでも平均5回は絶頂するアクメメスでもある。

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の世話を終えてひと段落、息をついたグズは大量にいるメスたちを見回していく。

ジロジロと遠慮なく視線を巡らせたグズは一匹の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に目を付けた。

「あいつにするかァ……ぐひ……♥」

最低な下卑た笑みを浮かべるとグズは餌を食べる一匹の犬の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に近づいていった。

そこにいるのは媚びるようにデカケツを”ぶりんぷりん❤️”と揺らして、餌桶に顔を突っ込んで食る、  
少しだけエリザに髪質の似た劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>だった。

グズはその劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の首を掴んで締め付けながら雑に持ち上げた。

「ぐえっ……❤️ あっ……な、なに、を……ぐうう……❤️」

「ほおお……おお、おお、悪くねえなあ……」

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>は総じて慎重140センチを切る低身長ばかりで、脂肪だらけの身体は柔らかくて軽い。

故に大柄のグズが片手で持ち上げることは簡単だった。

持ち上げた犬の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>をじろじろと見まわして、満足するように頷いてく。

その劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>は首を掴まれて呼吸もロクに出来ない状態でありながらも嬉しそうにしている、周囲の  
メスどもも餌を食べるのもやめて羨ましそうな視線を向けていた。

これはグズの密かな楽しみだ。

エリザに日々理不尽な叱責や、罰を与えられる使用人の中でも特に扱いが酷いのがグズ。

顔が醜いことを理由に罵倒され、罰を与えられる。

そんな環境故のストレスの発散法がこれだった。

首を掴んで持ち上げた劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>、その柔らかそうなお腹に狙いを絞る様に拳を握ったグズは――。

「ぐひひ……❤️ よい、しょおっと！！」

”ごずんっ！”

――大きく、硬いそれを叩きつけた。

「っっっ！？！　ぐへえええあっあああ❤️❤️❤️」

腹筋なんてないに等しい劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の腹に硬い拳は突き刺さった。

内臓に直接あたっているような衝撃に、メスは呻くように声をあげて——絶頂していた。  
理由すら告げられない急な暴力、首を掴んでつるし上げた相手にそのまま何度も拳を叩きつける。

髪質、色、目つき、鼻の形や声、なにかしら「エリザに似ている」要素を持つ劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>を見つけては暴力をふるう。

グズの数少ない楽しみがこれだ。

「げひっ。げひゃひゃひゃっ！」

”ごっ！ ごすっ！ どっっ！”

「んっぐぶっ♥ げほっ♥ いっイクっ♥ あがっ♥ イクっ♥ 」

ただの暴力の連続。

柔らかい腹を破らんばかりの連続の殴打に劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>はマン汁と小便まで垂らしていた。

度重なる殴打に、綺麗で柔らかそうだった腹は痣で染まっていく。

細い首を掴まれて、呼吸も許されないでの連続腹パン♥

苦痛を快感に変える劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>だからこそ、一撃ごとに絶頂していく。

相手が意識を失うほどの腹パンをして、口の端から泡を吹くまで責め倒した後にゴミでも捨てるように床に落としていった。

「ふいいい……♥ あ〜、いつかはエリザ<sup>ババア</sup>相手にこれしてやりてえなあ」

床に落として尚、痙攣するように絶頂をしていく劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の頭を踏みつけていきながら、自分の雇い主であり女王たるエリザを「ババア」呼ばわりしていく。

エリザ相手に溜め込んだストレスは生きたサンドバッグで発散と言うのがグズの日常だった。

「あのババアはなあ、見た目だきゃあ良いんだけどなあ……乳はこれっぽっちもねえけどよ」

もし、本人に聞かれたら死は免れないような発言をして行きながら、次の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に目を付けた。

「ひう……♥♥」

目が合った猫の獣人は、それだけで小便を、嬉ションを漏らしてしまっている。  
そのメスの元に近づいていき、また首を掴んで持ち上げると腹パンを繰り返す。

「お、いいな、お前は目が似てやがる……♡ イライラさせやがんなあ……♡」

「はっあひゅ♡ ご、ごえんにゃ、さ、おぐうう♡♡」

主人には逆らえないから、少しでも似ている部分のある劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に暴力をふるう、それがグズと言う男だった。

しかしながら、やられている劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちはそれを喜んでいるのでこれもまた、w i n - w i n の関係であったりもする。

「あんのババァっ！ いつも、人のことを馬鹿にしやがってっよぉっ！ でも、げひひっ……！」

「おごぉっ♡」

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>でストレス発散をしながら叫ぶグズ。

その表情は普段よりも非常に明るいものだった。

「あ〜♡ 今日是一段と力が入るぜええ……」

それは劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>を殴っているからだけでは決してない。

彼が楽しそうにしている理由は、ここに来る少し前に、非常に楽しいものを見れたからだった。  
それはエリザが、かつてないほどの取り乱し方をした姿を見たからだった。

## 【2章 B】

ことは、グズが劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちの世話を行う少し前のことだった。

実験を終えて、私室でエリザが政治についての判断、処理を行う時間。

その時は各国からの手紙や、大陸の情勢を伝える新聞などを読み、その聡明な脳みそを存分に利用して国の方針を決めていく。

使用人からしたら、その時間はエリザが部屋から出て来ないので安心できる時間帯でもあった。  
なのだが――。

”がしゃんっ！！”

「どういうことよ！！？　これは……ねえっっ！！　説明してみなさいっ！！」

「うぐえっえ！！？　ど、どうと、言われましても、おおおお……！！」

――大きな物音、破壊音が屋敷に響いていった。

グズ含めた使用人が音の元、エリザの私室に集まるとそこで彼女は使用人の一人の頭をヒールで踏みにじっていた。

美少女の長く、ムチムチした足で踏まれるのはご褒美と言う人もいるかも知れないが、エリザのその踏みつけには殺意に近い何かがあった。

普段は『残虐悪辣非道でありながらも気高い余裕を持つ』のエリザだが、完全に我を忘れたように気品も何もない声で叫び声を上げる。

さらに怒りを抑えきれないのか、それだけで平民の年収を越えるようなティーカップを手に取ると踏みつけている使用人に叩きつけた。

「いぎっ！！」

「答えなさい……なにが、なにがどうなってるの！？　なんなのっ……！　これはっっ！」

顔を真っ赤にして、怒りで身体を小刻みに震わせるエリザの手に握られたのは非常に良質の紙に書かれた手紙だった。

それを痛みに呻く使用人に突き付けるが、やられている方はどうすることも出来ないのだった。

ただ主人の命に応えるべく、その手紙に目を走らせて呟くように告げた。

「勇者……イクス、カルバート様と、げほっ、エルフの姫君……ミリアム様の婚約のお報せ、です……」

「~~~~~っっっ！！！！」

それを耳にして事情を察したグズは「ぶっ！」と噴き出すが、そんなことも耳に入らないほどにエリザは怒りに支配されていた。

使用人を踏みつけたまま、怒りに身体のコントロールが効かないのか歯をカチカチと鳴らしていく。

「なんで、なんで……なんでっっ！　どうして私を捨てたのですかイクスさまっ！　ああああああああ！！！！」

大きく声をあげて絶叫すると、使用人を踏みつけるその綺麗な足に力を込めた。

”グググググ！！”

「いぎいいい！？ エリザさ、さま！？ おやめください、あ、あががあやめ、やめ、やめてっ！ ああ  
ああっあああ！ ばばっ……ああああ！」

エリザの肉体は非常に強固で強靱だった。

彼女は魔術と美貌だけの女ではない、大の男の一人や二人、いや、十や二十をその手で殺すことも可能だ。

そんな女の足で踏みつけられた使用人の頭は無事であるはずもなく――。

「ぎやああああ！！ やめろ、いぎっ！！？ あ、頭がきしんで、あああああ―――ぺびゅっ！！」

”べちゅっん！！”

――水っぽい、大きな何かが碎ける、そんな音と共に踏み碎かれた。

野次馬の様に見ていたグズ含めた他の使用人の息を飲む声と、周囲に飛び散る血と脳みそ。

死んでなお痙攣する使用人。エリザの服と足を濡らす血。

その血を浴びて尚も止まらないエリザは何度も何度も、もう潰れた頭に足を振り落とした――。

「はああ！ はあ！ なんてっ！ なんて……！ なんてええええ！！！」

”どちゅっ！ ぐちゅっ！ ぐちゃっ！”

――何度も何度も、床を突き破るような威力で足は落とされて、数十秒で使用人の首から上はただの肉塊になっていった

踏むたびに周りにまき散らされる血と骨と肉。

ついにはエリザはその場に、服が汚れることも厭わずに、まき散らされた血の海に膝をついた。

子供の様に泣くエリザを見て、使用人たちは恐怖と共にかすかな喜びも感じてしまっているのだった。

自分たちを支配する絶対的に理不尽な女王、その恋が散ったことに、使用人たちは小さく笑みを浮かべた。

主が狂っていれば、その下の使用人も狂っているのは道理だろう。

そして何故、イクスとミリアムの婚約の報せにミリアムが取り乱すのか。またエリザの発した――。

「裏切った」

——の真意とは何か、という話は一年ほど前に遡る。

前提としてエリザは、自分のことを「完璧であり、あまりに完璧過ぎるが故に自分に並び立つ男がいない不幸」を背負って生きていると『自覚』している女だった。

美貌に才覚、その他の全てのもの、どれをとっても超一級であると自覚を持ち、それは思い上がりではなく事実だった。

そんな完璧なエリザに求婚する男はいても、自分と並びたてる男はいないと全て断り続けて445年。そんな中で出会ったのが勇者であるイクスだった。

魔王討伐の旅の道中、交通の要所であるこの国に立ち寄り、女王でありエリザに謁見をした。

そのとき、別に何があった訳でもない。

特別な事件があり、エリザがイクスに救われたとかそんな冒険もない。

ただ単純に彼女はイクスに一目惚れをしたのだ。

自分の美しさに並ぶ人間がいる、強く気高く優秀、そんな完璧ともいえる男性であるイクス。

彼に一目惚れをして——。

「自分の400年の孤独を埋めるのはイクスしかいない！」

——と強烈に、そして勝手に思い込んだのだった。

そして、更に勝手に——。

「イクスも自身と釣り合うほど優秀で美しい女は私しかいないと分かったハズ」

——とも思いこんだ。

エリザの長い人生初にて、あまりにも強烈は一目惚れは、『勝手に運命の相手と思い込んだ』イクスが結婚することであっさり終わりを告げたのだ。

失恋のショックはエリザの心に強い衝撃を与え、涙まで流させた

それも、魔王討伐の報せを聞いて以来、エリザは「いつイクス様が私に求婚しに来てもしも良い様にしないではいけませんね♥」などと、1人で浮かれて、一人で準備を勝手に進めてきていた。

既にイクスの部屋も準備しておくほどに浮かれ切っていた。

それが見事に打ち砕かれたのだ。

445年の人生における初恋の粉砕に、死の女王は耐えきれないようだった。

しかも相手がエルフの姫のミリアム、大陸の宝と言われるほどの美しさで、エルフだからこそその超デカパイ♥

エリザは自分の美貌に自身はあったものの、やはり唯一胸だけはどうしても小さいを乗り越して『無い』に等しいサイズが故のコンプレックスがあった。

涙を流すエリザの前に婚約の報せの中に入れられた写し絵——写真がヒラリと落ちた。

幸せそうに並ぶ二人、その花嫁、ドレス姿のミリアム、正確にはその胸元にエリザは視線を落とした。

非常に大きく、形が良く、いや、何よりも大きい、非常に大きいというか大きすぎるミリアム姫の胸。そこをエリザは睨みつけた。



「……………イクス様は……こんな……デカ乳だけが取り柄の家畜がお好きなのですね……？ ふふ……ふふふ……あは……あははははははあはははははははははは！」

眩きは狂気を孕んだ笑みへと変化していった。

それに流石に野次馬の様に見ていた使用人たちも逃げ出した、自分たちに飛び火しないようにと。

一瞬、外の使用人たちに視線が向いた瞬間、グズは慌てて「エリザ様、髪が乱れてますよ」などと言って、彼女が無意識に髪を直す隙をついて、笑いを堪えながらも同じく逃げていった。

残された哀れな失恋の女王はユラリと立ち上がる。

「……旦那様の好みに合わせることもまた良妻ですものね？」

その日、エリザの屋敷において4人の使用人の男と、16匹の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>が拷問死した。

怒り、そして気晴らしを兼ねた死の宴の末にエリザは動き出した。

『イクス様が間違えた選択肢を正すために妻として出来ることをしなくてははいけません♥』

という、狂気を孕んだ実験を開始したのだった。

## 【2章 C】

「出来たわ……………！」

イクスの結婚報告から数週間。

エリザはついにある目的のものを完成させた。

それは――。

「最高の劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>を作り出したわ……イクス様に捧げる完璧な牝穴人形<sup>オナホムソクルス</sup>……！！」

――実験室に置かれた大きな円柱形の水槽の中で浮かぶ、エリザをベースにして、彼女の持つ最高峰の魔術、医術知識を総動員して作り上げたエルフのホムソクルスだった。

顔は美しいエリザそのものの美少女でありながら、エルフの長い耳、そして大きすぎるほどに大きい

デカパイに、低身長。

全身どこもかしこもムッチムチのエロい身体をしていた。

これがエリザの出した答えだった。

これをイクスにプレゼント？ 違う——。

「あとは私の魂をこの牝穴人形オナホムンクルスに移行させれば……イクス様好みエルフに……！」

——技術と知識の粋を集めたエルフのホムンクルスに、自分の魂を移して、『エルフになる』というのがエリザの考えだった。

彼女の人生において、肉体において足りないものは何かとなったときにエリザは「私に胸がないから……きっと、あの薄汚いエルフは胸でイクス様を誘惑したのよ！」と判断付けた。

それならば自分の肉体を改造、もしくは『背格好そのまま巨乳のエリザ』のホムンクルスを作り出せば良いとは思われるがそうはいかない。

この世界では人体錬成と呼べる魔術は成功しないのだ。

神が人に与えた枷、人が人を作ることへの禁忌さ故などとも言われているが、何故か亜人のメスだけはその肉体を作ることに限れば可能だったりする。

それを突き止めたのもエリザだった。

400年の研究と実験の結果、様々な種族を材料に研究を進めた結果、劣等種族れつとうしゅぞくだけはホムンクルスとして肉体を作り上げられることを突き止めたのだ。

「214年前に実験をしていた助かったわ……」

しかしもちろん、作製可能であっても『簡単』ではない。

劣等種族れつとうしゅぞくのホムンクル錬成が可能なのは大陸でもエリザ含めて片手の指の数いるかいなか程度の偉業である。

だからこそ、それを作り上げたのは、エリザの類まれなる知識と技量だった。

エリザは自分の知識をフルに使い、数十匹のエルフを使用して、その肉体を完ぺきに、理想的に作りあげたのだ。

「この中に入れば……きっと……………！」

出来上がったホムンクルを前に恍惚の笑みを浮かべるエリザ。

彼女はイクスの為に自分の肉体すら取り換えようとしていた。

狂気を孕んだ愛の様相を見せつけながら、彼女は準備をしていく。

自分の魂を牝穴人形オナホムンクルスに移すのだが、その間も本当の、エリザ自身の肉体をその辺に転がしておくわけ

にはいかない。

魔術で編んだ、半透明な棺のようなカプセルに入り封印をほどこした。自分が死んだら自動的に魂がこの肉体に戻るようにも設定してある抜け目のなさだった。

そして、エリザは準備終わるとホムンクルスのエルフに自分の魂を入れるという非常に高度なことを実行していく。

自分の魂を、作り上げた<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形に入れると同時に本当の肉体は封印。

そうすると、エリザの魂が入れられた<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形が動き出した。

「ん……………あ……………んんっ……………」

ゆっくりと目を開けたのはエルフのエリザ。

はしゃぐようなことはしないで、五感の接続、肉体の状態を確認していくエリザ。

鏡を前に自分の姿を確認していく。



自分の美貌はそのままに、低身長で、エルフ耳、そしてバランスの悪いデカ乳とデカケツ。  
かのミリアム姫も凌ぐサイズになっているのを何度も確認していった。

「完璧……ね……これなら……っとな……！」

見た目だけじゃなく。完全に自分の肉体として問題なく動くことを確認して実験の成功に喜びの笑みを浮かべたエリザだったが、そのあまりにも大きくバランスの悪いデカ乳によろけてしまう。

「っ……ずっと見てきていたけど、こんなものをぶら下げて……バカじゃないの？」

自分のデカパイの重さでよろける、そんな生き物がいるなんてと顔をしかめる。

その重すぎるデカパイを “もむんにゅ♡” と持ち上げて、どう考えても身長とは合わないそれにエリザは不機嫌な顔をしていた。

イクスを振り向かせるためとはいえ、こんな身体に、恥知らず劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>になるなんてとため息をついたが、直ぐに切り替えていく。

「早く、イクス様に会いにいかねば……！」

よろよろ、ヨタヨタ、重すぎるデカパイに身体をフラつかせて、とりあえず用意しておいたワンピースだけを着ると実験室を出た。

最近ほとんど籠りっきりだったエリザはまだ慣れない身体を、特にそのデカパイを揺らして私室を目指して進む。

重すぎるデカパイ、“ゆっさゆさ” と揺れる歩きずらさを感じていたら、前方の曲がり角から使用人の男が現れた。

「んあ？ んん？ なあんでこんなところを家畜が歩いてんだあ？」

「っ！！？」

エリザの道を塞ぐように立った使用人、その大柄な男、グズ。

のしのしと廊下を歩いていた彼は、エルフ・エリザを見て首を傾げていく。

いつものように怒鳴りつけようとしたエリザだった。

急いでイクスの元にはいかなくは、そんなことばかり考えていたのに――。

「っ……あ……………♡」

「んん？　なんだあ？」

――大きい男を、大きくて醜い男を見上げただけでその身体は言うことを聞かなくなってしまうていた。

エリザの頭の中では「大きい♡　男♡　すごい♡　素敵♡　見下されてる♡　ドキドキが凄い♡」  
はそんな言葉で埋め尽くされていた。

なにか、言葉を発したいのに出て来ない。頭の中には目の前の醜い男に対する賛辞や好意、興奮が積みあがっていくありえない感覚にエリザは襲われていた。

エリザは完璧なエルフ――完璧すぎる<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族を作り上げた。

結果、本当に完璧で、どこまでも淫乱で、どこまでもマゾで、どこまでの変態的<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族が出来上がっていた。

普通のエルフのメスでも男を見上げるだけでまんこを濡らすのに、このエリザ仕様のエルフは――。

「は、あ、あ……………あっっっ♡♡♡♡」

――男を、醜く大きなグズを見上げただけで声をあげ、そして――。

「イっくうううううううううう♡♡」

”ぷっしいいひひひひひ♡”

――マン汁を噴き漏らしながら絶頂していった。

いきなりの反応にグズは面食らうが、そのエルフ、その顔があまりにもエリザに似ていることに気が付いた彼は舌なめずりをしたのだった。

最近の研究で実験室に籠りきりの主人、その主人に良く似たエルフ。

グズにとってこれ以上の玩具はないだろう。

まさか本人とは夢にも思わずに、見上げてきただけで絶頂したエリザの首を掴んで持ち上げるとグズはこれから行こうとしていた、<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族たちを飼育している部屋、牧場へと向かっていった。

――。

—————。

「しかし、見れば見るほどそっくりだなあ……」

「っ……………❤️」

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>たちに水と餌をやった後に、エリザの顔を覗き込むグズ。

その顔が主人に似ていると繰り返すが、似ていて当然、というか本人だ  
エリザはそのこと言うつもりもないようだった。

見下され、雑に運ばれて着いた場所は、エリザが一度も入ったことのない劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の牧場だ。

「……っ❤️（凄い……餌、よね、あれ、あんなの食べてるの？ 四つん這いで……❤️ わ、私も同じこと、するの？ じょ、冗談じゃないわっ❤️）」

エリザには牧場の光景が夢の楽園の様に映っていた。

四つん這いで、餌桶の中の餌を貪る姿はまさに家畜、そんなことを自分がするなんて人間状態のエリザならば思っていただろう。

しかし、今の彼女は完成された劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>、家畜扱いが好きでたまらない恥知らずな生き物だ。

「……！（ダメっ！ 何を考えているの！ 私は、私はエリザベート1世よ！？ 国の女王にて、天才魔術師！ そんな私がっ……か、家畜の真似事なんて……❤️）」

頭の中では必死に自分を律しようとしているのだが、エリザの脳みそは天才魔術師のものではなく、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>のものだ。

考える度に頭の中では最低な、プライドも何もないような行為への期待に高まってしまっているのだ。  
大きすぎる胸を呼吸の度に揺らして、何度も何度も生唾を飲むエリザ。

「ほんでえ、お前、名前なんだ？ なんてあんなとこいたんだあ？ それによく考えると服着てるのもおかしいなあ？」

「っ！？ あ……そ、それは……」

興奮に頬を赤らめているエリザにグズからの質問が飛ぶ。

エリザは頭の中では「直ぐに自分の名前をあかすのよ！」と自分に命令していた。

グズの前で潮を噴いた事実はグズを殺せばどうとでもないし、あくまでもこれは実験であり、肉体が動くことは確認した、もう充分、そうエリザは思っていた。

思っていたはずなのに、思ったように言葉が出て来ない、出て来ないどころか――。

「名前は……エリ……いえ、ら、ラウラ、よ……えっと、ま、迷ってしまって、屋敷に、その、フラフラと……（な、なにを言っているの私！　なんで、名乗って身体に戻ってグズを殺すだけよ！　実験は終わり、終わりなのにつ！）」

「ほおおん？」

――偽名に、作り話をしだしてしまっていた。

理性を裏切る行為を身体がしていく。

それに内心で慌てながらも、エリザは媚びたような視線をグズに向けていた。

何をされるのか、この家畜が住まう部屋でどんなことをされるのかとエリザは『期待』に胸を高鳴らせていた。

そこに――。

”ひゅっ！”

”ごすんっ！”

「ぐぶええええ！！？」

――グズの拳が腹に突き刺さるよにぶち当たった。

固く大きな拳は、エリザの子宮を綺麗に捕らえていた。

その一撃に軽い身体は吹っ飛び床を転がっていく。

「！？！　げほっ！　な、なにっ……！（殴られたわ？！　なんで、なんでいきなり、それに……なに、これ、この身体！？　腹筋がほとんどないわっ……！　知ってたけど、これじゃあ、エルフの身体って皮と脂肪で内臓守ってるってことじゃないっ！！）」

腹を押さえて痛みを耐えるエリザ。

まだその腹の奥で生まれた『熱い快感』は認識しきれずにいるようだった。

そんないきなり殴打に涎を垂らしながらも顔を上げようとしたところでグズが目の前に迫っていた。

「おう、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>ごときが俺にため口かあ？　口の利き方も知らねえからお前は低能メスなんだよ、ああ？」

「きゃああああ！！」

グズはエリザの頭を踏みにじっていく。

ずっとボコボコに犯したいと思っていた主人にそっくり劣等種族<sup>れっとうしゅぞく</sup>の登場に興奮が抑えきれない様子だった。

「っ！（もう限界ね、グズには地獄を見せてあげるわ……！ 死すら生ぬるい、死にたいと願う様な地獄を何度も何度も味合わせてあげるわ……！！）」

頭を踏まれるなんて人生でありえない屈辱にエリザは心を決めた。

グズを殺すことを、それはも覆らない決定だと強い意志で決めた……はず、なのに——。

「っっっイクっ……♡ イクっ♡」

「ぐひひ、劣等種族<sup>れっとうしゅぞく</sup>ってのはのほどこいつもこいつも淫乱だけどよお、頭踏まれていくのかぁ？ お前はよ♡」

「イクうううううう♡♡（なにこれっ！ なに、気持ち良すぎて、おまんこがずっと……♡ イッてる！？）」

——エリザは頭を踏まれて絶頂していく。

名前も名乗らず、グズを殺すこともなく屈辱を与えられていた。

それに身体は喜び、更なる痛みと屈辱を自然と求めてしまっているのだ。

どんなに強い意志を、気高い心を持っても身体は劣等種族<sup>れっとうしゅぞく</sup>、逆らう様なことは一切しない。

「おら、俺の名前だよ、グズ様だ、呼んでみろや♡」

蹴られて仰向けにさせられたエリザの顔をグズが踏みつける。

まるで靴底についたガムでも取る様にグリグリとエリザの顔を楽しそうに踏みにじっていく。

その上で、名前に『様』をつけろという発言。

本来のエリザならば既にグズの命など消えているはずだった。

プライドが高く、全ての存在は自分に跪くものと考えている、それがエリザだ。

そんな彼女が顔を踏みつけられて、腰をカクカ♡揺らし絶頂していく。

イキながら、エリザは——。



「グズ、様……♥ (あああ……私は何を、イクス様以外の男に”様”をつけるなんて！！)」

——媚びた笑みを浮かべながら、使用人で毛嫌いしていた相手に様を付けて呼んでいた。

「そうだよ、グズ様、だよ、わかったかあ？ <sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族ごときが舐めた口きいてんじゃねえぞ？」

顔を踏まれて、大嫌いな男に見下されてエリザは——。

「も、申し訳ございませんでしたあ♥ あああ♥ もっと……もっとな♥ (何を言っているの！？ もっとな、そんな……ダメよ！)」

——もともと潮を噴いて濡れていたまんこを、更に濃ゆい汁で濡らしてしまっていく。。

自分の口が、身体が、自分の意志に反してグズに媚びてしまう状況にエリザは困惑しながらも何も出来ない。

周囲の<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族たちに見られながらの服従アクメ♥

惨めな快感に何度もマン汁を噴いて絶頂してしまうエリザ。

「さあて、ラウラあ……お前は俺のでえっ嫌いなやつに似てっからなあ、死ぬほど惨めに犯してやんよ……♥」

「あ……ああ……♥ そんな……惨めに、なんて……♥ (ふざけないで、このゴミっ！ 私相手になんて口をきいてるの！？ このっ……なんで、なんでこの身体は勝手に喜んでしまうのっ♥)」

惨めに犯されると聞いてエリザのおまんこからは白濁した本気汁まで垂らしてしまっていた。

強い興奮にヨダレすら垂らし、顔の上から足が退けば、待っていましたというように直ぐ様服を脱ぐと、あまりにもデカいおっぱいを見せつけるように仰向けのままお股を開いて見せてしまう。

「お、お願い、します♥ グズ様の……その、お、お……オチンポ様で……ラウラを、は、は、ハメ殺してください、ましっ♥ (何をやってるの私はっ！！)」

「げひ……♥ イイ心がけだあ♥ にしてもでけえ乳だなあ……♥」

媚びた笑みを浮かべるエリザを見下ろして、グズのチンポはビキビキと固くなっていた。

ズボンを下ろせば、硬く、熱く、凶悪なデカチンがエリザの視界に入る。

それだけで——。

”ぷっしいいいいいいい♡”

———彼女は再び絶頂してしまっていた。

完璧に、とことんマゾで淫乱に作られたその身体は目の前のチンポに服従アクメをかまし、ヨダレまで垂らしていた。

「すご、い……♡ チンポ様……すご……♡ (なんで、私の身体なのに……♡)」

デカチンを前にして屈服する身体。

グズという最低の男に支配されたがる自分に困惑し、怒りながらも一切の抵抗は出来ないでいた。

「お前みたいな顔と乳とケツしか取り柄がないゴミに俺のデカチンくれてやるんだから感謝しろよ？」

いつか屈服するまで犯してやりたいと願っていた女にそっくり———と思っている———な相手に好き勝手出来ると思い、グズはグズで興奮していた。

勃起したチンポをエリザの完全未使用な穴に押し当てて、最低の笑みを浮かべる。

「あっ♡ あああ♡ あつい、すごい……♡ これ……♡ あああ♡」

「チンポ当てただけでお迎え潮吹きかよ、この淫乱が♡」

チンポがおまんこに当てられただけで潮吹きをするエリザ。

「これが……お、おちんぼ様っ……♡ (自然と”様”ってつけちゃう……なんで？ わからないわ、わからないのにな♡)」

視界に入っているだけでエリザの心臓は跳ね上がっていく。

400年を超える処女。

初恋は勇者に捧げたはずの一途な乙女なのに———。

「っ♡ (なんで、心臓がこんなにドキドキ……♡ 子宮も、な、なんなの、なにっ、ああっ♡)」

エリザの頭の中にはチンポ、グズのチンポことで一杯になっていく。

それは、人生で初の『恋』、勇者イクスへの燃えるような恋すらも超える感情だった。

柔らかそうなプニプニのおまんこは既に白濁した本気汁まで垂らして準備万端。

そこにグズは押し当てたチンポを一気に———。

「よおっとお❤️」

”ずっぷうう❤️”

「~~~~~っっっっ❤️❤️❤️」

———奥まで押し込んでいった。

エリザの柔らかい腹がグズのチンポの形に膨らんでいく。

音を立てて強く子宮が叩き、ヒダヒダの異常な多さのおまんこはその一瞬で、一撃で、処女喪失と共に———。

「いぐううううううううう❤️ イクっ❤️ イクイクっ❤️ イク❤️ あああああ❤️ これ駄目っ❤️  
イクっ❤️ 頭、ダメになっ❤️ イクうううううううう❤️」

———エリザは全身を痙攣させてイキまくる❤️

あまりにも強烈な快感に脳にまでダメージが入ったのか鼻血を垂らして至福の笑みでの処女喪失&初おまんこアクメをかましていた。

「ひいいっ❤️ いいい❤️ (嘘……嘘嘘嘘っ！ わ、私の初めて、い、イクス様の為にとっておいた、処女なのにな……！　なんで、こんなにっ❤️)」

人生で初の処女膜姦通にエリザの身体は絶頂する。

今日この日まで、どんな男のチンポも到達したことのないそこに侵入したのは醜い男、グズのチンポだ。

「ひあっあ❤️ ああああ❤️ (イクっ❤️ なにこれ、なんで、グズのチンポで、イク❤️　なんで、こんな、あ、ありえないっ！　イクっ❤️)」

大嫌いな、視界にも入れたくない醜い男のチンポで400年ものの処女を奪われたエリザ。

本当の自分の肉体じゃなくても、喪失の感覚は事実であり、彼女の脳みそに強く焼き付いていく。

その瞬間に彼女の脳には強い感情が植え付けられた。

それは劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>では非常にありがちな———。

『チンポを入れてくれた相手に恋をする』

———ものなのだが、エリザにはまだその感情を理解できないでいた。

ただ、気持ち良さに流されて、腰をくねらせて喘いでいく。

「うお……ラウラ、おめえ……えげつねえまんこしてんな♥ こりゃハメがいがああるなあ……！」

「ひぎいいいいいい♥ すごっ♥ すごいいいい♥ (これがチンポの快感！？ これが、これが  
劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の感じている快感なのっ？ こんな、こんなの♥)」

一回ピストンされる度に一回絶頂する。

それほどのアクメ地獄を味わい、鼻血を出しながらエリザは今まで生きてきた中で最高の幸せを感じていた。

自然と媚びた笑みを浮かべて、おまんこを必死に締め付けてチンポに「もっと犯して♥」とおねだりアピール♥

歯をカチカチ鳴らして、「ひゅーひゅー」と瀕死みたいな声を息を漏らす。

チンポを深く押し込まれる度にマン汁を噴き漏らしていく。

「はあっ♥ あああ♥ あひいい♥ (なんで、嘘、なんでっ！ こんな醜い男に犯されて喜んでるの！？ だめ、だめっ！ こんな、こんなの私じゃないっ……ああああ♥)」

エリザが作り上げた最高の<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形♥

奥までしっかりと柔らかくて、チンポにどこまでも媚びるように締め付けるエロ穴♥

そこをほじくられる度に、エリザはデカパイを揺らして、自分の中に渦巻く大きな感情をコントロールできないでいた。

「はああ♥ きもちい♥ あああ♥ イクっ♥ イクうう♥ (なんなの、これっ♥ 気持ち良いっ♥ 気持ち良いだけじゃなくてっ……♥)」

「おっうあ♥ ほれっ……！ この、クズまんこが、ああっ！」

「ひぎいいいい♥ はっ♥ あああ♥ イクイクイクうううう♥ (考える暇もないくらいイキっぱなしでっ♥ 死ぬ♥ チンポに、殺されるっ♥)」

グズは、エリザの細い腰を掴んで一気に奥までチンポを押し込む。

ギリギリまで抜いてからの一気の押し込み、チンポがおまんこを容赦なく擦っていく。

「くひいい♥ こ、こんなにゃのおおおおひいい♥ (なんで、嘘っ♥ こんなに気持ち良いの！？ それに、なんで、ああっ♥ 愛おしさまで感じてきちゃうのっ！？)」

気持ち良いだけじゃない感情に戸惑いながらも、エリザの身体は感じまくり、ムッチムチの足をピンと伸ばしてイキまくる♡

チンポがおまんこを擦る度に生まれた快感が背骨を上って脳みそで弾ける、そのたびに――。

「イクっ♡ イクっ♡ ひいい♡ イクうう♡ (こんなの、ほんとっ、初めてっ♡ 知らない♡  
こんなの全然知らないっ♡ うう♡ またイク♡ 脳みそ溶けるっ♡)」

――エリザが絶頂していく。

鼻血まで垂らして、だらしないイキ顔を晒していき、メスの匂いを垂れ流す。

牧場に、同じ部屋にいる獣人たち、普段は実験動物で玩具でサンドバックの彼女たちの見られながらの連続絶頂♡

「おらっ♡ その小生意気なツラがもっとだらしなくなるまで犯してやんよっ！ ぶっ殺してやるからなあ！」

「いくっ♡ あっ♡ ありがとうございますひゅう♡ ラウラをチンポでころひてっ♡ (嫌よっ！  
死ぬなんて、死ぬなんて嫌っ！ 嫌、なのに……♡)」

死を言葉にされるとエリザは必死に頭の中でだけ抵抗する。

死を、老いを退けて生きてきたエリザにとって、死は遠い敵でありながら常に意識しているものだ。

美しくありたい、その根底にあるのは死にたくない、だ。

その死を意識しながらも、エリザの身体が強い快感を味わっていき、腰の痙攣が止まらないようだった。

頭の中では「嫌だ！」って思っているのに、身体は「チンポに殺される期待」にイキっぱなしだった。

「お望み通りっ……！ ぶっ殺して、やっからなあ！ 劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>がっ……！」

「は、はひい♡ お、お、おお願い、しまひゅっ♡ (死ぬ……殺される、嫌、嫌なのに、なんで♡ この人なら、なんて思ってるのっ！？ 私、狂ってるの！？)」

醜いグズの必死なピストン。

本気でエリザを殺そうとしているような気迫のこもったその刺激に、彼女のおまんこはマン汁を噴き出していく。

犯して、犯して殺そうとするようなグズ相手のセックス、イキ殺そうとしている行為に、エリザは『ときめいて』しまっていた。

彼女はその感情をこれっぽっちも理解できないまま犯されていく。

理解できないし、理解をしたくないと必死に脳からかき消そうとしていた。

「ひぐううう❤️ ふかつい❤️（うううう……！ チンポが、おまんこの奥を叩くたびに、こんな、気持ち良くて、こんな……グズなんかを……❤️）」

太いチンポを奥まで難なく飲み込むエルフのまんこ。

チンポに対して自然に形を変えて、一番相手が気持ち良い形に変化するのがエルフまんこの特徴だ。

エリザの作り上げた最高品質の牝穴人形は、その機能が非常に強く、劣等種族<sup>オナホムンクルス</sup>を犯し慣れたグズでも――。

「おおおっ、すげえな……っソ、生意気なまんこ、しやがってえ❤️」

――驚くほどの超名器。

チンポにしっかりフィットでザーメンを搾り取る気満々❤️

もちろん、自分のおまんこの弱点もさらけ出す様になっているので、一回チンポが出入りするたびに2回近く絶頂していた。

「いくううう❤️ チンポ様❤️ しゅごいい❤️ ステキっ❤️ あひええええ❤️ ひいい❤️ イク❤️  
イクううう❤️（気持ち良すぎて……！ もう、理性が、ああ、もう、ダメっ！）」

快感にどんどんエリザの理性は崩壊していった。

腰を打ち付けられる度に生まれる強い快感に、もうエリザは敗北寸前と言うか、敗北を認めようとしていた。

元から勝ち目はないし、挿入された時点で負けているのだ。

チンポを目にした時点でエリザは――。

『<sup>恋</sup>負けている』

――のだから。

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>にとって立派なチンポはそれだけで恋の訪れだ。

それを必死にエリザは脳内から消そうとしているのに、一向に消えないどころかピストンされる度に大きく大きくなっていった。

自分から腰を振る余裕はないまでもチンポに媚びて、潮吹きしながらの連続絶頂。

そこに更に――。

「へ、へへへ、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>のくせに、生意気なまんこしやがって、よおっ！」

「へっあ♡ え♡ (拳、振り上げて、まさか♡ グズ……！ わ、私を殴るのっ！？ こ、こんな、柔らかくてプニプニのお腹を！？ 殴ってくれるの！？ そんな……♡ ああ……♡)」

——グズが拳を振り上げる、それだけでエリザは絶頂していた。

おまんこから与えられる快感だけではなく、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に刻まれたドMで淫乱な気質は腹パンにさえ興奮してしまっていたのだ。

しかも、エリザは「お腹を殴ってくれる」とまで思うほどに、頭の中を、思考回路を侵食されていた。

むしろ、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>としては正しい思考回路になっていれるとも言える。

振り上げられた拳を、まるであまーいお菓子を掲げられているように見つめるエリザの腹に向かって——。

”ごっ！”

「っ♡♡♡ (ほんとに、ほんとに、来たあ♡)」

——硬い拳が叩きつけられた。♡

背骨まで突き抜ける刺激、しかも床に寝ている為に衝撃は逃げることなく、全て自分に届く。

そんな一撃を浴びせられて、超淫乱マゾな身体は耐えられるはずもなく——。

「ひぎいい♡ イクイクイクう♡♡ あひいい♡ げほっ♡ イキ死ぬうううううっ♡ (これ、だめええ♡ こんな、こんなあ♡ 脳みそ、ダメになるっ♡ すごいいっ♡ こんな惨めな気持ちになってイクなんて♡)」

”ぶっしいいいっ♡”

——あっさり服従潮吹きアクメ。

「へっ！ 本当にどうしょもねえなあ……こんなもんでイクのかよ、ああ！？」

”ごっ！”

「へぎいい♡ イいいいい♡ (お腹っ♡ ダメになるっ！ 身体がダメに、なるっ♡ 脳みそまで、全部っ♡ 壊されるのに、なんで♡ もっと、もっと欲しいって……なんでっ♡ 殴られるのを期待しちゃってるのっ！？)」

笑われながら、またグズが拳を掲げればそれを眩しそうに見上げる<sup>れっとうしゅぞく</sup>劣等種族。

殴られることをわかっていて、エリザはその拳に生唾を飲んで待ち望み、遠慮も何もなくそれが振り下ろされると悲鳴をあげて絶頂していく。

腹筋がほとんどないような、柔らかいプニプニお腹にグズの拳は突き刺さり、激しい絶頂をエリザに与えていく。

「はっあ♥ ああああ♥ いっぎいいいい♥ ひっい♥ (チンポと腹パンの二つで子宮責められて♥ もう、わ、訳わかんないっ♥ 一秒ごとに脳が死んでるっ♥ 殺されてくっ♥ チンポでっ♥)」

ピストンされる度に2回イキ、腹パンされればそのまま潮吹きアクメ。

エリザの身体は完全に玩具の様に犯されていた。

それを見ていた周囲の<sup>れっとうしゅぞく</sup>劣等種族たちは、あまりの激しさに羨ましそうに見ながらオナニーを開始するほどだった。

「おらっ！ 言ってみろよっ、私はゴミです、グズ様のチンポがないと生きていけないカスですってなあ！ あのババアそっくりの顔で言ってみろや！」

日頃の恨みと、主人に対する欲望を発散していくグズ。

まさか本人とは思わずにそんな言葉を強要していく。

「っあ♥ はっあ♥ イクっ♥ あああ♥ ひいい♥ (おまんこの奥まで、チンポが入ってくるたびにっ♥ お腹殴られる度にっ♥ グズのことが……♥ グズ”様”のことが……♥)」

エリザの柔らかい腹には何度も殴られた証の痣が浮かんでいた。

拳を落とされる度にイキ、もちろんチンポが深く挿入されてもイク♥ 何をされてもイクような状態になっていく。

それは快感だけではなく、エリザが作り上げた完全<sup>れっとうしゅぞく</sup>劣等種族の身体は、『自分にチンポを入れてくれる』相手のことを敬うように作られていた。

エリザとしても<sup>れっとうしゅぞく</sup>劣等種族の習性はもちろん知っていたけれど、あくまでも『知識』としての知っていたレベル。

だけど、自分が<sup>れっとうしゅぞく</sup>劣等種族になって、初めてこの身体の『チンポに対する服従心』の強さを知っていく。

何よりも、自分の処女を、400年の人生で一度も誰にも触れさせなかったそれをぶち破ってくれたグズに対しては恋も、愛も飛び越えて――。



「ああ❤️ ひいい……いい❤️ グズ……さまあ……❤️（嘘よ、こんな感情、なにこれ！？ イクス様、よりも、ずっとグズに対する感情が大きいなんて……❤️）」

——敬愛、崇拝、神聖視すらしだしていた。

劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>にとってチンポをくれる相手はまさに神。

しかも、ただ犯すだけではなく、容赦なく腹を殴り、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>を『壊し慣れている』男とのセックスが初体験なんてありえない幸運だ。

気持ち良くて、とことん幸せで、その感情がどんどん溢れていく。

「グズ様っあ❤️ ひいいいっ❤️ グズ、様ああ❤️（こんな男を様付けで呼ぶ、なんて……最低っ！ 惨め！ 舌を噛み切りたい屈辱………なのにつ❤️）」

密着するように締め付ける穴の奥をチンポで突き上げられて、グズに様を付けて呼ぶ度に劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>の服従欲が満たされていく。

自分の処女を奪って『くれて』、その上で腹パンまでして『くれる』グズに対して、エリザの人生で初恋であるイクスに対しての恋愛感情を上回る、強い愛情と崇拝が産まれていった。

「っはああ❤️ あああ❤️ グズ様❤️ チンポっ❤️ あ、あひいい❤️（グズの、くせにっ❤️ ゴミみたいな人間のくせにっ❤️ なのに、なのにいっ❤️）」

深くチンポを挿入されて、下腹部をその形に膨らませる。

子宮口を”どちゅっ❤️”と叩かれて痙攣するように足を震わせて絶頂していく。

「あ～、このエロ穴……くっそ、チンポの為にあるような穴じゃねえか！」

「っ❤️（チンポの為にあるなんて……❤️ そんな、っ、最低なこと言われているのにっ……❤️）」

グズの言葉一つ一つに対してまるで熱に浮かされたようにエリザは感動してしまっていた。

一回絶頂するごとに、どんどん脳みそが破壊されていくような感覚の中で、グズに対する愛を、崇拝を高めていく。

もう、グズに対して普通ならば言わないセリフでさえ、崇拝し、神聖視してしまっているエリザは——

「は、はひいい❤️ わらひはゴミ、れひゅうう❤️ グズ様のチンポで生かして頂いているカスおまんこ

ですう♡ もっとチンポくらひゃいい♡ (もう、だめ♡ 身体だけじゃなくて、頭の中まで……♡  
グズ様って思っちゃってる、凄いて素敵って♡ 服従したいって……♡)」

——あっさりと口にしてしまっていた。

自分を犯してくれるグズを見上げながら演技での媚びじゃなくて、本気で、本気で「チンポで生かして貰っている」とまで思ってしまった。

綺麗な瞳に蕩けたハートを浮かべておまんこを痙攣させてイキまくっていく。

「へ、へへへ、そんなに欲しいなら、もっとくれてやんよっ！」

「はへえええ♡♡ 死ぬっ♡ ああああ♡ イキ殺してくらひゃいませえ♡ (殺されるっ♡  
殺して貰えるっ♡ ほんとに？ 本当にチンポで殺して貰えるのっ?)」

自分で言えと強要しながらも、エリザの顔と声で言われると殊更に興奮するグズ。

その興奮で更にピストンと腹パンは激しくなり、もう犯しているのか壊しているのかわからないほどになっていた。。

彼もエリザ程ではないにしても普段以上の興奮で、普段よりも早く射精の予感を捉えていた。

ズボズボとおまんこを激しく犯しながら——。

「お望みとおりに、して……やんよおお！」

「ぐひいっ♡ (うそっ♡ まだあるの！？ これ以上が、まだ♡ まだ♡ まだ凄いのがあるの!?)」

——エリザの身体を無理矢理反転させる。

次なる快感、これ以上の快感の予感にエリザは潮を噴いていく。

バックの体勢にしたら、その小さな身体を持ち上げて逆駅弁の体勢にしながら首に腕を巻き付けるヘッドロック。

周りでオナニーしている他の劣等種族<sup>れっとうしゅぞく</sup>たちに見せつけるようにの首絞めイキ殺しチンハメ♡

「はあ、はあ、ラウラあ……射精と同時に殺してやっからなあ？ べろお♡」

「げほっ♡ ひぐいいい♡ (息、できな、耳い♡ 耳らめえ♡)」

首を強く締め付けられて、身体を浮かしたままチンポで支えられているエリザ。

呼吸も出来ない中で、敏感な耳を舐められてまたエリザは潮吹き♡

エルフの耳はオスならば象徴でプライドであり、成人すればピアスを空けるが、メスはほとんどピアスをしない。

何故ならば、メスエルフの耳は非常に敏感な性感帯なのだ、もしピアスでもしようものならただでさえ万年発情期のエルフが、24時間絶頂しているような状況になりかねない。

その耳をグズの分厚い舌が舐めまわし、さらに――。

「クソマゾの便所のエルフにゃあ、これがきくよなえ？　べろお…………がりっ！」

「！？！？！？！」

――首を絞めながら、そのエリザの長い耳に歯を立てた。

噛みちぎるほどではないけれど強い噛みつき、本来なら痛みしか感じない行為だけれども、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>にとっては別だ。

噛まれた瞬間にエリザの身体が強く痙攣し――。

「いっぐいいいいいいいい♡　ひいいいいイクううう♡　グズしゃまあああ♡（耳っ♡　ダメ♡　これ、死ぬっ♡　あああ♡　脳みそ死ぬ、グズ様に殺して貰えるっ♡）」

”ぷっしいいいいいいい♡”

――潮を噴いて足をバタバタさせて絶頂しまくる。

一瞬でした絶頂回数は実に7回、7回分の絶頂を一気に味わってエリザは鼻血を垂らしていく。脳が死んでいくような快感を存分に味わっていた。

「あっ……あひい……♡（これ、脳、壊れ。だめ……あ……）」

「ああ？　もう終わりのつもりかよおめえ……」

激しいを乗り越えて壊れるような絶頂で、その最中に死のうとしていくエリザだがグズがそれを許さない。

片腕をエリザの首に回して締め上げつつ、その手でさっきまで噛んでいた耳とは反対の耳を――。

”がしっ！”

「ひぎいっっ♡♡♡」

――乱暴に掴んでいく。

掴んだだけでじゃなくて、手を揉むように動かして、爪を立てる度に――。

「あっがあ♡ イクっ♡ また♡ ひいいい♡ コリコリ、はへえええ♡ (脳みそが直接死ぬうう♡ <sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族凄いいっ♡ こんな快感ありえないっ♡ 教えて下さってありがとうございますグズ様あ♡)」

——エリザは電気ショックでも与えられたように絶頂脳死しかけの身体をビクビク震わせていく。  
チンポ、首絞め、そして耳舐め耳噛み、耳掴みの強すぎる快感の相乗効果にエリザは今度こそ——。

「ひっい♡ イク♡ 死ぬっ♡ ひぬっ♡ (殺して貰えるっ♡ こんなに、こんなに幸せなのっ！？  
なんで、私ずっと人間なんかで400年も生きてたの！？ 私の400年より、この瞬間の方が……ずっと……♡)」

——完全にイキ死ぬと覚悟していた。

おまんこを深く押し上げるチンポ、そして耳への刺激、噛まれる度に「いぐう♡」と濁った声をあげていく。

だけど、それだけじゃ終わらない、まだ終わらない。

グズはエリザの耳に歯型がつくほど噛みつきながら、まだ余っている片手を強く握った。

それを薄れゆく視界の中で捉えた<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族は、それだけで潮を噴く。

「へはあああ♡ しょんにゃの、ひぬ♡ ぜったい、ひぬっ♡ (嘘♡ まだ、まだ先があるの♡ 気持ち良いに、まだ先が♡)」

どんどん暗くなる視界の中で、グズのチンポからの快感にはしっかりと反応してマン汁垂れ流し♡  
次に与えられる快感の予感、握られた拳を見ただけで潮を繰り返し間欠泉のように噴いていく。

抵抗不可能な超脆弱な<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形なりに、グズの腕を防御反応で掴んで、脚をバタつかせる。

しかし、その程度ではビクともしない。

「かひゅっ♡ あがっ♡ ひぐいい♡ い……くう……♡ (殺して、ください♡ グズさま♡ グズ様のチンポで♡)」

ゆっくりと薄れ行く意識、目の前が赤く染まっていくような感覚にエリザはまた潮を噴いていく。

「まだだぞっ、俺の射精に合わせろやっ……！ 先に死んだら、殺すぞ？」

「はひっ♡ かひっ♡ イグうう♡」

”ぶしいっ♡”

”ぶっしっ♡”

理不尽な言葉すら今のエリザには興奮してしまう。

死という、生命に対する最大級のダメージを考えるだけでエリザの脳内ではとんでもない量の快樂物質がドバドバ出ていた。

耳を噛まれて、舐められて、反対の耳も掴んで弄ばれて太い腕で首を絞めつけられて、呼吸も出来ないままに――。

「っし、出すぞっ！ 合わせて、死ねっ、や！」

――グズは握った拳、その底をぶち当てる、鉄槌などと言われるやり方でエリザの腹を強く殴った。  
いくつもの快感と快感の連続、重ねの末のトドメの一撃♡

「あいがとうございまっ♡ いっ♡ イク♡ イグっ♡ イクうううううう`う`うううう  
♡♡ (好き♡♡ グズ様♡♡ グズ様♡♡♡♡)」

”びゅるるっ！ どびゅるっ！”

射精に合わせて、エリザの身体の全てを刺激して、全てを同時に一気に与えていく。

そのあまりにも強い快感に、デカ乳を揺らして足をバタつかせ、防御反応を見せながら涎と鼻血を垂らしての激し過ぎる絶頂。

死と快樂、もしくは死の快樂で完全にエリザの脳は死んだ。

「ふiiiiiiii……きんもちい……っと、お、死んだかあ？」

グズはエリザの体を雑に床に落とした。

死んだはず身体はまだ痙攣を続けていて、床に適当に落ちながらも絶頂し、マン汁を噴き出していた。

グズは。その顔を踏みつけて笑う。

まだ、ほんの少し意識を残していたエリザは――。

「あ……あ……♡ (凄い、私、完全にこれ、玩具♡ グズ様の気分が良くなるだけの……♡ お……も、ち……………や)」

――強く、強くグズに対して感謝を刻みながら、最後に大きく、死に対しての潮を、死に潮を噴いていく。

死ぬ寸前まで絶頂する、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>としての生き恥を晒してみせたのだった。

## 【2章 D】

——。

—————。

「っっっっ！！！！　っはぁぁぁ！！　は……！」

ラウラこと、エリザの魂を入れた<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形が死んだ直後、その魂は本人の身体に戻った。

エリザは目を覚ましてさっきまでの事を思い出していく。

「私……なに、を……………」

<sup>オナホムンクルス</sup>牝穴人形としてエルフになり、そしてグズに滅茶苦茶に犯されて死んだ、殺された事実。

弄ばれて死んだ、それより何よりも——。

「なんで、あんな、よ、喜んで……！」

——その行為が嬉しくて喜んで、グズに対して愛以上の感情まで芽生えてしまっていたことが強いショックだった。

エリザは寝ていた棺のようなそこから魔術の封印を解いて急いで起き上がると鏡の前に向かった。

「私……よね？　そう……私、よ……」

自分の顔を、姿をしっかりと見つめる。

そこにはエルフの耳も、バカでかいおっぱいもない、ただの、いつも通りのエリザベート1世の姿があった。

しかし、それに彼女は違和感を覚えてしまっていた。

「……………耳」

恐る恐る触れる人間本来の耳、それはついさっきまで感じていた強い快感を味合わせるものではなく

なっただけだ。

そして、そっと触れる下腹部、犯されながらあんなに意識できた子宮が今そこにあるのかも疑わしいのだ。

締め付けられた首も後はなく、慌てて服を捲り上げて確認した腹にも痣はない。

「そう、よ……さっきのは牝穴人形オナホムンクルスの身体の出来事で……………っなの、にっ……………」

安心と、それを超えるような強い喪失感を得てしまっていた。

耳がない、デカ乳がない、子宮を感じられない、腹パンの痕がない、首を絞められた跡がない。

本来ならば「良かった」と安堵するはずなのに、エリザは強く後か——。

「そんなわけじゃない！！！」

——い。その感情を無理に排除した。

息を荒らげ、自分がグズにイキ殺されたことを「嬉しかった」と考える前に思考を断ち切った。

「ありえない……嘘よ、あれは劣等種族れっとうしゅぞくの身体だったからよ、あれは失敗作ね、劣等種族れっとうしゅぞくの性質を再現しすぎたわ……！」

無理にでも、「あれは私の意志じゃない」と結論付けたエリザ。

身体にさっきまでの記憶が蘇っていきそうで、下腹部が熱を持つような感覚を否定するように部屋を出た。

「例え、なんであれ私を侮辱した罪は許されないわ……」

早足で向かうのは牧場。

ついさっきの出来事である以上グズはそこにいる、そのグズを殺してしまおうとエリザは考えていた。

「屠殺人なんていくらでもいるわ、あんな醜い男を雇っていたのが間違いね……」

頭の中ではどう惨めに殺してやろうか、そればかり考えて廊下を進んでいき、その曲がり角で——。

「おっとお、おや、エリザ様、へへへ、こんなところで珍しいですなあ……」

「グズ……」

——グズと出くわした。

少し面食らいつつも、殺そうと素早く魔術を使おうとしたエリザだが、その前にグズが小脇に抱えたズタ袋に目が行った。

「……………それは？」

「え？ あ、ああ、メスが一匹死んでたんで、バラして肉と血をとろうとしていたところであ」

「……………（あれは、私……よね……）」

<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族はエリザの持ち物、それを勝手に犯して殺すなんてのは本来許されないことだ。

それを誤魔化そうとするグズだが、そんなことよりもエリザは袋に、その中にいるだろう『自分の死体』に意識が向いていた。

さっきまで自分だった肉体、犯されて殺された自分がそこにいるという事実に、エリザのおまんこから汁が一筋垂れた。

「えっと、エリザ様、どうかしやし ”どごっ！” ぐへええええ！？」

「……………」

黙りこくったエリザだったが、その反応にグズが不安になった瞬間にその腹を殴り飛ばして巨体を転がした。

成人の頭を踏み砕くほどの脚力があるエリザの腕力もまた、常人を凌駕していた。

「げほ！ え、エリザさ、いぎ！？」

「……………」

蹲ったグズの頭を踏みつけたエリザ。

踏まれたグズの脳裏には、頭を踏み砕かれた使用人の顔が思い浮かんで、必死に「許してくだせえ！ 申し訳ねえ！」と謝罪していくがエリザはそんなグズを見ないで床に落とされたズタ袋を見た。

緩んだ袋の口から飛び出したのは自分そっくりの髪、顔は見なくてもわかるのだろう。

さっきまで入っていて犯し殺された自分の死体を見ながら、中空に魔方陣を描いて鞭を作り出した。

「……くい」



「へ……え？」

そして、その鞭を振りかぶり振り下ろした。

”ひゅんっ！　べちいいん！！”

「醜いっ！　醜いのよ……このグズ！！　視界に入るなっていつてるでしょ！？　このゴミっ！　殺されたいの！？」

「あゝ あゝ あゝ あああ！　すんませんっ！　許してくださえええ！　いいいい！！」

グズの頭を踏みつけながら何度も何度も鞭をその身体に振り下ろした。

頭の中にあるものを全て追い出そうとするように鞭を振り続けて、数分後ようやく気が済んだのか肩で息をしながら手を止めた。

「はあ……はあ……はああ……」

「お、おおお、ぐいう……！」

100以上も打たれて痛みでロクに動けないグズ。

それでもどうにか機嫌を取ろうと「髪がお乱れですよ」などと言うが、これほど鞭をふるえば当然だろう。

エリザは髪を撫でつけながら鞭を消すと最後に、グズに唾を吐きかけて　結局、殺すことなくその場を去った。

残されたグズは、痛む身体を起こしながら「あのババア、勇者様が結婚したことがまだ腹に据えかねてんのかあ？　最初から相手にされてなかったろおが……」等と呟いた。

そしてふと気が付くと、自分の頭があったあたりの床に数滴の水の跡があることに気が付いた。

気が付いたが、気にすることもなく、痛む身体を擦りながら、ズタ袋を担いでその場を後にした。

それから、エリザのグズに対する態度は今まで以上に酷くなった。

前以上の暴言に合わせて理不尽な罰が日々与えられていた。

鞭で、素手で、魔術で、殺しはしないだけで連日繰り返しエリザによる攻撃を与えられていた。

その裏で、エリザは自室にて――。

「っ！　はああ、なんでっ……ああああ！」

――激しい自慰行為に耽っていた。

連日、研究も実験もせずに自慰三昧であった。

全裸になり、ベッドの上で乳首、クリトリスを捏ねて。おまんこも弄る。

だけど、一向にイける気配もない。

「これじゃ、全然……お腹の奥が……！」

思い出すだけで死にたくなる程の屈辱と、それを上回る快感がエリザの脳に焼き付いて離れない。

イキ殺された記憶が彼女を苦しませていた。

さらには――。

「……………っ！　今は、いない、はず……！」

――グズの部屋に一人忍び込んでいた。

彼女はグズに「勝手に実験動物を壊した」として、今まで黙認していた<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族へのセックスを禁じていた。

それにより、グズは自室での自慰行為が非常に増えているようだった。

それを見越して、彼女は薄汚いその部屋に入るとゴミ箱を漁った。

「あった……！　これ……精液……グズさっ！！　グズの……」

咄嗟に「グズ様」などと言いそうになった自分の言葉を飲み込むとエリザは行動していく。

漁ったゴミ箱の中には大量のティッシュがあり、そのほとんどがオナティッシュ。

それらを手早く持参した、保存用の袋に詰め込んでいく。

さらには一番上にあったまだ温もりのあるものを、彼女は――。

「だめ、何考えているの？　ダメよっ……！　私はエリザ、エリザベート1世よ！？　女王たる私が、あ  
あっ……むぐっ❤️」

――口の中に入れた。

そして、紙ごとそれを噛み締め、臭いに、味に酔いながらその場でオナニーを始めてしまっていた。

グズに<sup>れつとうしゅぞく</sup>劣等種族への手だし禁止は罰と言いながら、オナニーをさせる策であり、絶対にエリザは認めないが「自分以外のメスにグズのチンポをあげたくない」という独占欲が産まれだしていたりする。

彼女の脳みそにはあの時の快感がもうこびり付いていて、グズに対して怒鳴り散らして当たらないと、いつ媚びてしまうのかという不安の中に生きていた。

こんな風にオナティッシュを漁って、それを口に頬張りながらオナニーしている時点でアウトなのだが、エリザは目を背けていく。

しかし、そこまでしてオナニーしても、興奮はしても絶頂には至らない。

「にやんでっえ……！　お願いっ♥　イキたいのっ……！」

ザーメンをティッシュから啜り、他のティッシュの臭いを嗅ぎながら床に這いつくばっておまんこをかき回す。

もうなりふり構ってられないエリザは、グズが履きつぶしたブーツを見つけると、それにも舌を這わせていく。

「れろ……♥　れろお♥　なに、やってりゅの、わらひはあ……♥（お願い、踏んでっ♥　踏みにじってっ♥）」

異常さを自覚しながらもやめることが出来ないでいた。

絶頂できないイライラは使用人と、劣等種族<sup>れつとうしゅぞく</sup>に、特にグズに強く向いていた。

そんなことを繰り返し、オナニーではイクことが出来ない、そして例えイったとしてもあれほどの快感を得られる保証もないという状況に彼女はいた。

「……………っ……！」

イケない現状に、あんな惨めな思いはしたくないとエリザは必死に自分を説得しようとするけれど、心も、身体も再びアレをと欲していた。

その欲望に、あの脳みそが溶ける様な快感を求めてエリザは――。

「……………！」

――下唇を噛みながら、二体目の牝穴人形<sup>オナホムンクルス</sup>の作成を決意するのだった。

また、もう一度、今度は前みたいにならないと誓い、おまんこから汁をポタポタ垂らしていくのだった